

対話型講演会「認知症になっても自分らしく生活したい」 ～認知症当事者の声を聴く～

Interactive lecture “I want to live my way even if I become demented”
～ Listen to the voices of demented parties ～

吉 田 修 大¹⁾²⁾

Takehiro YOSHIDA

黒 澤 直 子¹⁾²⁾

Naoko KUROSAWA

尾 形 良 子¹⁾²⁾

Ryoko OGATA

佐々木 浩 子¹⁾³⁾

Hiroko SASAKI

認知症当事者および家族への支援に関する研究プロジェクトの目的

近年、高齢化に伴い認知症への関心が高まっている。しかしながら、認知症は、現在の医学では予防することができない病のひとつである。認知症のメカニズムや治療については研究が進められており、現時点では認知症の進行を遅らせることができる薬は開発されている。しかしながら、医学において認知症のメカニズムや治療法が十分に確立されているとは言い難い。

このような状況を踏まえ本学人間福祉学研究科および生涯スポーツ学部健康福祉学科所属の4名の教員で、「認知症当事者および家族への支援に関する研究プロジェクト」を立ち上げた。筆者らの社会福祉専門職が支援者としてクライアントと対峙する時の立ち位置は、自助努力では解決することのできない生

活上の諸課題に関して支援を必要とする人たちと一緒に解決方法を考え、その人らしい生活を実現するために支援する専門職であると捉えている。

現在、超高齢化社会の中で国民の多くが将来への不安を抱え、特に認知症に関わる懸念が存在し、中でも進行の緩和や予防などに一般市民の関心が高まっている。

一方、社会福祉は認知症を抱える当事者や家族が疾病を抱えながらも「いかにその方らしい生活を実現するか」を考え、どのような疾病や障がいの程度であろうとも、その人を支えられる社会を目指すものである。このような前提のもと、本研究は社会福祉の原点である当事者の尊厳を守ることに関心を持ち、具体的に尊厳を守る実践や教育がどのように可能になるのかについて明らかにすることを目的とする。

1) 北翔大学大学院人間福祉学研究科

2) 北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科

3) 北翔大学教育文化学部教育学科

本プロジェクトの背景と経緯

これまでの研究の成果において認知症の人や本人への支援に関しては、認知症への対応や介護の方法に関して様々な観点から研究が行われてきた。一方で、認知症の本人がどのように受け止めているかという当事者からの視点での研究はほとんどない。また、認知症の家族介護者に対する研究は、家族介護者の介護における受け止め方に焦点をあてたもの、家族介護者への支援方法の2点に関するものがほとんどである。

以前は介護における受け止め方は、介護負担感という介護に対する否定的な評価に焦点をあてた研究が中心だったが、最近では介護への満足感や充実感、自己成長感という肯定的な評価の研究もされるようになってきているという動向がある。

本研究の実施により「誰もがなりたくない病に掛かり、家族に介護負担をもたらす存在」かのように語られがちな認知症を抱える当事者の尊厳を守るということは、具体的にどのような視点で何をすることなのかが明らかになる。

また、こうした尊厳を支える当事者や家族の会の課題を捉え、解決の方向性を探ることができる。さらに、本学学生への「尊厳」に関わる授業の中で、従前は尊厳というキーワードと抽象的な説明に依拠していたが、具体的に検討し尊厳を守ることのできる専門職養成に貢献できると考えられる。

1. 本講演会の趣旨・目的

このような現状と問題点を踏まえ認知症当事者から現在の生活や将来への希望を伺い、認知症になったとしても尊厳が守られ生活す

るための視座を参加者とともに共有することを目的とする。さらに、認知症になっても自分らしい生活が実現できるような社会をいかにして構築していくことができるのか、参加者とともに一緒に考えることとしたい。

本講演会の特徴として「対話型」講演会であることが挙げられる。これは当事者(話者)をよく知る聴き手が巧みに本音を引き出したり、当事者の認知症の症状による話の混乱を本筋に戻し、講演会の狙いに沿って進めるというあり方を聴衆が共に経験することができる点が何より経験しづらいことだと考えられる。本講演会は、このような経験を積み重ねていくことを通じて認知症の症状や認知症当事者の現状や課題を聴衆と共有することができる点に独自性がある。

本講演会の対象は認知症当事者や家族介護者(ケアラー)はもちろん、このテーマに関心を持っていただける市民の方、認知症ケアに関わる専門職および学生の方である。本講演会を通じて、少しでも認知症当事者や家族介護者だけではなく、認知症ケアに関わる専門職の関係者、一般市民の認知症に対する理解が進むと考えられる。

1. 本講演会の概要

(1) 企画名: 対話型講演会「認知症になっても自分らしく生活したい」～認知症当事者の声を聴く～

講師: 中村 成信氏

聞き手: 中村 久子氏(ケアサービスドワン代表取締役、公益社団法人日本高齢者グループホーム協会北海道支部理事)

助言者: 黒澤 直子(北翔大学大学院人間福祉学研究科准教授)

- 司 会：佐々木浩子（北翔大学大学院人間福祉学研究科教授）
- （2）日時：2017年2月18日（土）13：30～15：00（開場13：00）
- （3）場所：北翔大学 北方圏学術情報センター PORTO（札幌市中央区南1条西22丁目1-1）
- （4）主催：北翔大学 北方圏学術情報センター PORTO 認知症当事者および家族への支援に関する研究プロジェクト（※研究プロジェクトメンバー：黒澤直子、佐々木浩子、尾形良子、吉田修大）
- （5）後援：北海道，札幌市，札幌市社会福祉協議会，札幌市民生委員児童委員連絡協議会，日本認知症ケア学会，北海道認知症の人を支える家族の会
- （6）参加者：約130名

2. 講演会の内容

講演会では、助言者・研究代表者である黒澤より研究プロジェクトおよび講演会の趣旨について説明があった。2013年には認知症高齢者は462万人、2025年には700万人となることが推計されている。このような状況を踏まえ、マスコミやメディアも含め認知症に対する関心が高まっている。しかし、現在の医学では、認知症は予防法や治療法が確立されていない病気である。また、認知症への正しい理解が十分ではないがゆえに、多くの偏見や誤解が生じている。認知症になることを恐れるよりも、認知症になったとしても住み慣れた地域で安心して暮らせるまちづくりが、日本だけではなく世界各国の目標となっている。

本講演会では認知症当事者からお話を伺い、認知症に関する正しい理解と安心して暮



画像1-1：講演会の様子①



画像1-2：講演会の様子②



画像1-3：講演会の様子③

らすことができるまちづくりや社会の実現に向けた課題を共有することを狙いとする事とした。

3. 中村重信氏の講演内容

（1）自己紹介と認知症の説明

中村氏は神奈川県茅ヶ崎市役所の職員とし

で勤務していた。12年前にスーパーでバレンタインのチョコレートを会計せずに持ち帰ろうとしたため、万引きの現行犯として逮捕され懲戒免職処分となった。家族は中村氏の行動や言動を不審に思い「うつ病ではないか」と心配し、中村氏を心療内科に受診させた。中村氏の家族は心療内科の医師より認知症が疑われるので、大学病院を受診するよう勧められた。大学病院での診察の結果、中村氏は前頭側頭葉変性症（ピック病）と診断される。

前頭側頭葉変性症（ピック病）は、主な症状として人格の変化、行動障がいなどが生じる。しかし、「認知症」という病名は、広く世間に知られているが、そもそも医学的に認知症という病名はない。例えば、アルツハイマー病、レビー小体型認知症、脳血管性認知症などが挙げられる。特に患者数が少ない前頭側頭葉変性症（ピック病）は現在も原因不明で治療法が確立されておらず、2016年には難病にも指定された病気である。

中村氏は発症後12年が経過した現在は、本を読む、文章を書くことが苦手になっており、文字を読むことは可能であるが内容を理解することができなくなっているとのことであった。しかし、中村氏の場合には言葉を話すことは可能であるため、講演会などで当事者から認知症について話すことを通じて偏見や差別をなくし、認知症の理解を深める活動を行っている。

（2）認知症と診断されてからの経緯

懲戒免職後、医師から前頭側頭葉変性症（ピック病）と診断され、失意の毎日であった。特に病気に対してどのように受け止めたらいいいのか、当時は56歳であったため仕事が

できない（失った）ことに対して考えや気持ち整理できず、しばらくは自宅で引きこもるような生活をしていた。事件から1年後、中村氏は近所の介護施設の理事長から「有償ボランティアとして仕事をしないか」と誘われ、現在も施設の庭や花壇などの環境整備の仕事が続いている。当時を振り返って中村氏は、「働く場があって、社会の役に立てること」にやりがいを感じていた。

また、同時期から、週2回でデイサービスを利用している。中村氏はデイサービスには、「スポーツジムに通っているつもりで通所している」とも話される。

さらに、主治医からの勧めもあり、中村氏は趣味活動に精力的に取り組んでいる。元来、中村氏は写真が趣味だったため、一眼レフのカメラを購入し写真を撮っている。当初は妻が付き添い、中村氏と共に外出して写真を撮っていた。その後、妻は社会福祉協議会へ相談し、ボランティアで写真の撮影に連れて行ってくれる人を募集し、その方と一緒に写真を撮るようになった。さらに、ボランティアの方が所属している写真サークルにも参加して精力的に活動している。今回の講演会のように全国から中村氏に対して講演依頼があり、現地で講演と共に写真を撮ることが楽しみとなっている。

（3）中村氏の奥様からの手紙

本講演に当たって、中村氏の奥様からお手紙を頂戴し、聞き手の中村久子氏より紹介された。中村氏の奥様からいただいた手紙には主に4点の内容が記載されており、①認知症の症状について、②認知症について正しく診断できる医師が少ない、③周囲の人の理解が

得られにくい、④外出する際には見守りが必要であることを訴えておられた。

特に中村氏が外出した際には、中村氏がない時を見計らって自宅の中で見たことがない物がないか、すなわち店内の商品がレジを通らずにお金を払わないで自宅に持ち帰っているのではないかと常に気がかりとのことであった。

(4) 認知症になって良かったこと

中村氏からは、大きく2つのことを教えていただいた。第一に、講演会の依頼があり、全国に行くことができる。第二に、認知症にならなければ出会うこと、関わるできなかった多くの人と出会い、認知症にならなければ出会うことのなかった人と新たな人間関係を構築することができたことであった。また、全国各地で出会う認知症当事者、支援者との交流も中村氏にとって大きな支えとなっている。

(5) 認知症・認知症予防

誰もが認知症にはなりたくないが、現在の医学では治療・予防が困難な病気である。しかし、中村氏は認知症になったとしても自分自身が認知症であることを公にできる社会を構築することが重要であると話される。さらに、「お互いに理解しながら生活することができ、認知症の人にも優しい地域は、誰にとっても住みやすい地域である」と主張されていた。

また、認知症予防という観点から「予防」という言葉に頼るのではなく、地域の人に助けってもらいながら生活できる地域づくりが重要であることを指摘された。認知症になった時にどのように生きていくことができるのか、皆がお互いに理解しながら前向きに生き

ていくことができる社会の実現が重要であるとも訴えていた。

(6) 聞き手、助言者の論点

助言者の黒澤は、スウェーデンの認知症病棟に勤務する看護師から「予防したがるのは日本特有で、どうして認知症になってはいけないのか」という問いを投げかけられたことがある。日本では認知症の正しい理解が十分ではないことから、偏見や差別的な視点で認知症を捉えてしまうことこそが課題である。

さらに、聞き手の中村氏も北海道恵庭市の実践を例に挙げながら、「恵庭市は認知症になったとしても安心して暮らせるまちづくりを目指す」という取り組みについてもご紹介していただいた。

(7) 中村氏の講演のまとめ

講演会の最後に中村氏は、まとめとして以下に示す6点を主張された。

- ①認知症になっても何もできないということはない
- ②認知症になったとしても悲観することはない
- ③認知症になってから、第二の人生が始まった
- ④認知症になって失ったものもあるが、得られたものの方が多い
- ⑤認知症になっても不幸ではない
- ⑥認知症と公表できる社会の実現

4. マスコミの報道

中村成信氏は講演会前日の2017年2月17日(金)、新千歳空港に到着してから講演会が終了するまで、HTB(北海道テレビ放送株式会社)による密着取材を受けておられた。本プロジェクトが開催した「対話型講演会



画像2：講演会終了後に参加者へのテレビ取材の様子

認知症になっても自分らしく生活したい」の講演内容も含め、中村成信氏の生活の様子やメッセージは、HTBの情報番組「イチオシ!」のシリーズ企画「老いるショック」で2017年2月28日に放送された。なお、HTB（北海道テレビ放送株式会社）の「老いるショック」特設サイトのホームページやYoutubeの動画でいつでも視聴することができる。HTBのシリーズ企画「老いるショック」は、平成28（2016）年、日本民間放送連盟賞特別表彰部門「放送と公共性」で優秀賞を受賞されている。2015年9月から「老い」にまつわる多様なテーマを地道に取材、放送してきた姿勢が高く評価されている。

また、当日の様子は、北海道新聞（2017年2月19日朝刊）でも取り上げられた。

まとめ

本研究プロジェクトでは、2017年8月6日にケアラズカフェを開催し、また2017年2月18日に対話型講演会「認知症になっても自分らしく暮らしたい」を開催した。本研究プロジェクトは、誰もが安心して住み慣れた地域で自分らしく暮らしていくために認知症に

対する理解を深めることと同時に認知症当事者および家族介護者を支援していくことが社会福祉専門職に求められる重要な課題であることを再認識することができた。筆者らは認知症当事者および家族介護者のみならず、中村氏が本講演会で話くださったように「地域全体で認知症の理解が進み、認知症であることを公表できるようになればいい。認知症の方に優しい地域は、誰にとっても住みやすい地域である」を実現できるよう理論化することと共に社会福祉専門職、地域住民、認知症当事者および家族と連携して実践していくことが求められている。

また、本研究プロジェクトを通じて孤立しがちな地域住民は認知症高齢者および家族介護者だけではなく、地域社会の抱えている諸課題を包摂する社会福祉実践が重要であることも改めて再認識することとなった。中村氏の講演を通じて現在の医学では予防することができない病気のひとつである認知症になったとしても個人の尊厳が守られ、これまでの生活が継続でき安心して住み慣れた地域で暮らすことができるまちづくりや支援するシステムの確立と実践が喫緊の課題である。